

八千代の庚申塔

[巖 由美](#)

はじめに

庚申塔は、最も普遍的で数も多く、近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物です。

庚申待は、六十日に一回庚申の夜に、眠った人間の体から三尸が抜け出し天帝にその人の罪過を告げられないよう徹夜するという道教に由来した信仰で、室町時代ごろから庶民にも浸透し庚申講が行われるようになると、その供養の証しとして「庚申塔」を建立する風習が、江戸時代、各地に定着しました。

中世の初出は、「奉申待供養結衆」銘が刻まれた川口市の文明3年(1471)銘の板碑で、北総では、香取市貝塚来迎寺個人墓地内に、「天正二二年」(4年1576)「當村善女」により「奉守庚申」三ヵ年供養のために建立されたとの銘が刻まれた宝篋印塔があります。

江戸時代の庚申塔の初出は、元和9年(1623)の足立区正覚院の弥陀三尊来迎塔と三郷市常楽寺の山王廿一社文字塔、千葉県最古は松戸市幸谷観音境内の寛永2年(1625)の山王廿一社文字塔と報告されており、荒川(現江戸川)流域を起源とすると考えられ、いずれも板碑型の文字塔です。

17世紀中葉のころの庚申塔の主尊は、阿弥陀・地藏・観音など多様ですが、17世紀後葉から18世紀末までは青面金剛像が主流となり、日月・三猿・邪鬼・二鶏が付されることも多く、また18世紀以降は「庚申塔」の文字塔と推移していきます。

庚申塔は、ムラに悪霊が入らないよう、街道の辻に建てられることも多く、また道標を兼ねる庚申塔もみられ、八千代市内の道標105基中33基が庚申塔です。

第1部 八千代市域の庚申塔

庚申塔は、八千代市域において数多く寺社境内や路傍に見られ、その数は、『八千代の歴史 資料編』(2006)の「石造文化財」の概説によれば、昭和

期までの石造物総数約2600基中、庚申塔は432基に及びます。

市域北東部の日蓮宗地域でも、主尊を帝釈天とする庚申講が盛んで、この地区の114基中、「南無妙法蓮華経」の題目銘や「大帝釈天王」の主尊銘がある庚申塔が57基ありますが、刻像塔の像容は、他地域と同様です。

I 前期＝元和～正徳(～1716年)まで25基の特徴

1.市内最古は高本の各面一匹ずつの三猿つき笠付角柱塔

吉橋の高本八幡社の万治3年(1660)銘の三面に一匹ずつ三猿を浮彫りにした笠付角柱型が市内最古で、銘は「為庚申待現當二世悉地成就処 講人数十八一結諸衆 敬白」。

続いて、萱田飯綱神社下の庚申塔もこの型式です。

この形態は、1691年まで千葉・神奈川・東京に21基あり、うち、4基は八千代市域、3基が隣接市域で、高本の万治の庚申塔は、それらの発祥の源となる貴重な文化財です。

なお、昨年(2019)に調査した保品の記年銘を欠いた庚申塔も同形態で、これを合わせると市内の数は5基となります。(⇒第2部)

2.市内唯一の地藏像庚申塔は神野の石仏

神野の旧薬師堂には、延宝2年(1674)銘の光背型地藏坐像塔があり、銘は「奉新造立庚申待為供養石仏地藏一体二世安樂所」で、市内では唯一の地藏像庚申塔です。

近接した佐倉市先崎には、慶安3年(1650)丸彫地藏坐像があり、「奉造立庚申人数廿五人／先崎村」の銘が背中に刻まれています。「先崎地藏尊」として広い地域の信仰を集めている石仏で、神野の地藏像庚申塔もこの塔との関係性が類推されます。

初期は、地藏像のほか、船橋市では薬師如来像や釈迦如来像(日蓮宗系)、印西市では聖観音立像など諸仏の庚申塔も見られます。

3.「高津村」から市内に青面金剛像庚申塔が現れ始める

旧高津村の村境、八千代消防署前(大和田新田字一本松前)には、延宝2年(1674)銘の笠付角柱型の青面金剛像庚申塔が祀られています。

これは青面金剛像の庚申塔として八千代市内初出で、以後、前期で約半数の12基に青面金剛像が浮彫りされていきます。その多くは笠付角柱型です

が、高津字宮ノ前の貞享 2 年（1685）塔は駒型、神野字新山の正徳 2 年（1712）塔は舟形光背型です。

像容は細身で小さ目、二手を合掌し宝輪・矛・弓・矢を持つ六臂像で、頭は尖り蛇が巻き付く像が多くみられます。神野の正徳 2 年塔の像は、合掌せず、左手に剣、右手に人身（シヨケラ）などを持つ六臂像で、前期では珍しい像容です。

Ⅱ 中期＝享保～享和（～1804 年）まで 122 基の特徴

1. 個性的で雄渾な青面金剛像塔

享保期に入ると、ほとんどの庚申塔に青面金剛像を浮彫りするようになり、寛政期まで青面金剛像塔最盛期となります。

悪霊が入らぬよう、街道筋の村境の塚上には、躍動感のある雄渾な像を彫った庚申塔が競い合うように、建立されます。

形態は、笠付角柱型に加えて、徐々に駒型が増え、像容は、合掌型六臂像のほか、剣持六臂像も増えてきます。

頭部はとんがり帽子状のほか、焰髪状や山型に 3 裂・5 裂に外反した冠状も見られ、また、二鶏や二童子を配した手の凝った石塔もあります。

- *元文 5（1740）保品字庚塚 *寛保 4（1744）大和田新田字太郎右エ門野
- *延享 2（1745）勝田字新山 *寛延 4（1751）吉橋寺台字西芝山
- *寛政 4（1792）高津字宮ノ前（自衛隊駐屯地内）

2. 道標付き庚申塔の登場

明和期ごろまで（～1770）は、「庚申待供養」「諸願成就所」などの造塔目的や願文が丁寧に彫られています。安永期以降は、「講中」や「村」名などを残して銘文は省略化されて行きます。

信仰目的から、村の共有の公共施設としての性格への兆しが見え始め、一部には、道標を兼ねる庚申塔も登場します。

- *寛延 2（1749）大和田新田字坪井向「むかうへゆけば さくらみち・・・」

3. 地域的な特徴のあるワンパターンな彫像塔

下総地域では、青面金剛像塔が数的にも最盛期になる中期、個性的な彫像塔のほか、画一的な特徴の像容の庚申塔が多数みられるようになります。

延享 3 年（1746）銘の吉橋尾崎の庚申塔にみられるように、主尊の目がア

ーモンド形で、右手に鈴状または人身の頭部らしき袋状のものをもち、宝輪を持つ手が直角で水平に伸び、迫力がない邪鬼がうづくまる姿の特徴は、印旛地区・印西地区から白井市や船橋市の東部、我孫子市・柏市・栄町に広がっています。

また三猿の意匠も、両端横向きで中央が正面向きの形でよく類似し、配置される台座や塔身下部のスペースにより、一列の平型、または三角型に配置する特徴があります。

これらの特徴を大島洋一氏が「生首持ち型青面金剛」と提起、さらに印旛・手賀沼周辺に限定してこの青面金剛像塔が 118 基、三猿文字塔が 17 基あり、時代も享保 3 年（1718）から宝暦 12 年（1762）の 44 年間に限定されることが、石田年子氏により報告されています。

- *延享 3（1746）吉橋尾崎字芝山 *寛延元（1748）桑橋字作が谷津
- *寛延 3（1750）真木野字台 *宝暦 9（1759）吉橋高本 八幡社
- *宝暦 9（1759）小池字庚申裏

Ⅲ 後期＝文化～慶応（～1868 年）まで 165 基の特徴

1. 文字塔にかわる

江戸中期終わりの天明期（1780 年代）ころからの庚申塔は、青面金剛像塔から三猿付文字塔に替わり、後期はほぼすべてが駒型の文字塔の時代になります。

前半は、主尊名が「青面金剛（王）（尊）」*1 に、文政期頃からはほぼ「庚申塔」+「講中」銘になりますが、日蓮宗地域では「大帝釈天王」銘*2 が現代まで続きます。

そして幕末期、米本や村上では神道系の「猿田彦命（大神）」銘*3 も見られるようになりますが、数は少ないです。

- *1 文化 13（1816）吉橋寺台字西芝山
- *2 万延元（1860）真木野字台 「帝釈天王 講中」
- *3 天保 3（1832）米本字山谷 「猿田彦命」・同 米本 長福寺
- 文化 4（1807）村上根上神社横「猿田彦尊 天鈿女命」
- 安政 2（1855）村上字立野台墓地「猿田彦大神」道標付
- 安政 3（1856）村上根上神社横「猿田彦大神」道標付
- 万延元（1860）村上七百餘所神社東「猿田彦大神」

2.こだわりの独自色

単調な文字塔でも、書体にこだわったり*1、道標銘を刻んだり*2、梵字主体の意匠に凝る*3など、「違い」を見せようとしているものもあります。

- *1 文化15(1818) 吉橋高本八幡社 「青面金剛王」
安政5(1858) 下高野仲新山「庚申塔」
- *2 文化元(1804) 勝田又兵衛割 「右うすゐ道 左下いちば道」
文化15(1818) 萱田町字中台「右むらかみ 左かやた道」
- *3 文化6(1809) 保品字庚塚 種字「ウーン」

3.二種類の一石百(千)庚申

村境の庚申塚に、各時期の歴代の庚申塔が数基から十数基以上建ち並ぶ姿は、小池の庚申塚など八千代市域でも珍しくありませんが、印西市・柏市・鎌ヶ谷市などでは、江戸後期に、一度に百基の庚申塔を建立した「多石百庚申」が見られます。

八千代市内に多石百庚申はありませんが、多石百庚申成立に先行する「一石百庚申」とみられる銘の庚申塔が2基あります。桑橋の塔*1は、百体の庚申塔を巡拝、上高野の塔*2は千社を参拝するという庚申信仰を表す「参詣型」、麦丸の塔*3は、「青面金剛」・「庚申」の文字を100または多数刻んだ一石百文字塔を簡略した「百体型」に分類しました。

- *1 文化9(1812) 桑橋字作ヶ谷津 「奉参詣百社庚申塔」
- *2 万延元(1860) 上高野相野 「奉拝千社庚申塔大願成就」
- *3 文化12(1815) 麦丸字麦丸台庚申塚 「一百青面金剛王」

近現代＝明治～平成

明治維新後も、庚申講の続いている町や村では、庚申塔が建て続けられ、明治から昭和20年(1945)の終戦まで99基、戦後の昭和期まで12基建立されています。銘は日蓮宗地域で「大帝釈天王」が残りますが、それ以外ではほぼ「庚申塔」に統一され、形態も一部自然石もありますが、概ね駒型になります。

萱田・村上や下高野・保品では、道標付きが多く20基を数えます。

平成になっても、下高野・神野や小池では、御影石製の新しい庚申塔の建立が続いています。

第2部 三面各面一猿付角柱型庚申塔の発祥と関東での分布

1.高本の万治三年銘庚申塔

八千代市吉橋の高本八幡社入口の庚申塔群には、万治3年(1660)銘の笠付角柱型の庚申塔があります。八千代市内最古の庚申塔で、総高140cm、笠と塔身は一石で彫りだされ、水鉢付の台座に載っています。

光背型の輪郭内下部に三面に三猿を一匹ずつ浮き彫りし、上部には建立年月日と願文、建立主体の銘が、また猿の下には十八名の人名が刻まれています。上部の銘文は次の通りです。

「(種字) 万治三天庚子十月吉日／為庚申待現當二世悉地成就処／講人数十八一結諸衆／敬白」

三面に彫られた各猿の像容は写実的で丸彫に近く、笠・塔身・台座のバランスもよく、青面金剛が主尊として定着する以前の三猿主体の庚申塔としてたいへん優れた石塔です。

2.類似型の近隣地域への広がり

三面各面に一猿ずつ配し、願文を刻した笠付角柱の庚申塔の類似型は、次のように近隣に広がっていきます。

- ・寛文3(1663) 佐倉市新町嶺南寺(笠を喪失)
 - ・延宝元(1673) 八千代市 萱田飯綱神社下(左右面に男女別に人名列記)
 - ・延宝3(1675) 白井市 富ヶ谷薬師堂
 - ・延宝五年(1677) 佐倉市 白井田お猿の松(水田内・冬のみ立ち入り可)
- また天和2年(1682)八千代市平戸字道地と同島田字通原の、日蓮宗系題目庚申塔にも、この形態が継承されています。

3.保品庚申塚の年不明庚申塔残欠

昨年(2019)に保品で調査した角柱型庚申塔の下部残欠には、左右正面に各一猿が浮彫りされ、「諸願成就二世安樂攸／[] 月吉日／星名村郷願主廿六人敬白」と二十数名の人名が列記されています。

中世に使われた郷名「星名」の字は、慶長7年(1602)の清宮家文書で確認できますが、石造物では、年銘のある享保11年(1726)銘の庚申塔以降すべて「保品」となっています。

この庚申塔は、他の三猿庚申塔事例と比較すると17世紀後葉の延宝期ごろの庚申塔と推測され、保品では最古といえます。

4. 関東での類型庚申塔の分布

万治3年の八千代市高本と寛文3年の佐倉市新町の塔に続いて、寛文年間では横浜市・江東区・藤沢市など、延宝年間では都内や小田原市・鎌倉市の広がりが見られます。千葉県内では木更津市吾妻神社に1基あり、道標付きです。千葉・都内・神奈川で計21基が確認され、約40年間続きますが、貞享と元禄期には三面にそれぞれ猿を配した上、正面に青面金剛像を付けた庚申塔も見られ、元禄期を最後に、三面各面一猿像庚申塔は姿を消し、青面金剛像塔に代わっていきます。

5. 高本の万治3年銘庚申塔を市の文化財にしましょう。

近世庚申塔の初期、正面向きの三猿を並べた板碑型は、各地に見られますが、角柱の三面に一猿ずつ三猿を配した庚申塔は、地域と時代が限られ、珍しい点もあって横浜市や藤沢市、江東区では市や区の文化財に指定されて保存されています。

高本八幡社の塔は、八千代市内最古の庚申塔としてだけでなく、近世初期の三面に三猿を配した角柱笠付型庚申塔の初発といえることから、私はぜひ八千代市の文化財に指定されるべきだと思っています。

皆様方からご意見、また同型の事例情報をお待ちしていますので、どうかよろしくお願いします。

三面各面一猿付角柱型庚申塔の関東での分布 (作成：蕨由美)

No	年銘	西	所在地県	所在地市	所在地	銘文などの特徴
1	万治3	1660	千葉	八千代市	吉橋・高本八幡社	「為庚申待現當二世悉地成就処」
2	寛文3	1663	千葉	佐倉市	新町嶺南寺	「奉造建庚申塔」
3	寛文6	1666	神奈川	横浜市	泉区中田町御霊神社	「南無阿弥陀仏」
4	寛文8	1668	東京都	江東区	亀戸3普門院	「奉造立庚申結衆二世安樂処」
5	寛文9	1669	神奈川	藤沢市	本町常光寺	阿弥陀三尊種子「南無阿弥陀佛」
6	延宝元	1673	千葉	八千代市	萱田飯綱神社下	「奉造立庚申之人数石仏之現當二世悉地所」
7	延宝3	1675	千葉	白井市	富ヶ谷の薬師堂	「奉造立庚申為現當二世也」
8	延宝4	1676	東京都	豊島区	高田2丁目宿坂金乗院	「奉建立庚申塔婆二世安樂攸」
9	延宝5	1677	千葉	佐倉市	臼井田お猿の松	(未読)
10	延宝5	1677	神奈川県	小田原市	飯泉観音	奉造立更新供養悉口成就
11	延宝8	1680	東京都	台東区	下谷小野照崎神社	「小野崎大明神寶前」(六角柱)
12	延宝8	1680	鎌倉市	笛田	笛田中志房	「奉造立庚申供養」
13	延宝8	1680	千葉	木更津市	吾妻神社	「奉供養新庚申 為二世安樂也」(道標付)
14	延宝8	1680	神奈川	小田原	久野 京福寺	「奉修庚申待供養 為二世安樂」
15	天和2	1682	千葉	八千代市	島田字通原	「南無妙法蓮華經」
16	天和2	1682	千葉	八千代市	平田字道地	「妙法蓮華經」
17	貞享3	1686	神奈川	横浜市	戸塚区吉田町八幡神社	正面に青面金剛像 左右裏面に猿
18	元禄2	1689	神奈川	茅ヶ崎市	十間坂3-17大六天神社	
19	元禄4	1691	東京都	中野区	中央慈眼寺	正面に青面金剛像
20	元禄5	1692	神奈川	小田原	久野 大畑観音堂	奉修庚申待供養
21	元禄16	1703	東京都	文京区	本駒込3-40 天祖神社	「奉待庚申為二世安樂」



No1 高本八幡社



No6 萱田飯綱神社下



保品庚申塚 年不明

時代区分 (筑波大学での日本美術シソーラスで使われた区分)

江戸時代前期 = 1615~1716

江戸時代中期 = 1716~1804

江戸時代後期 = 1804~1868

近代 = 1868~1945 現代 = 1945~



小池の庚申塚 (日蓮宗系)